

【研究ノート】

ヴェブレンの「見せびらかしの
ための消費」について

——「消費社会」論のための予備的考察——

三 谷 真

〔1〕

現代ではあらゆるものが人々によって消費されている。我々をとりまいて
いる様々な種類の財は言うに及ばず、マス・メディア、レジャー、スポー
ツ、教育や医療、そして性を含んだ一切の人間関係までも消費されている。
そこではあたかも消費されないものは存在しないかのようである。まさに世
の中は消費を中心に回っていると言えるだろう。その意味で現代は「消費社
会」と呼ぶにふさわしい時代である。この現代の消費社会を解説することは
すべての社会科学に求められた緊急かつ重要な課題であろう。そのためにな
されなければならないことはまず第一に消費の概念の再検討である。「〈消費〉
をどう捉えるかに、現代社会を理論的に解明する鍵がある⁽¹⁾」と考えられるから
だ。

しかしながら、事はそう容易ではない。なぜなら、経済学を含めて我々の
前には明確な消費の概念が存在しないからである。山崎正和の言葉を借りる
ならば次のようになるだろう。⁽²⁾

「それにしても驚きにあたひするのは、人類が数千年の消費の歴史を闊し

(1) 山本哲士「消費のメタファー」1983年、121ページ。

(2) 山崎正和「消費社会の人間学」、『中央公論』1984年2月号、66ページ。

ながら、消費といふ基本的な概念についてこれほどまでに無反省であり、ほとんど何ひとつ定義らしいものを持ってゐない、といふ事実である。」

消費とは物の使用による欲望の充足である、と言ってみても、それはほとんど同義反復である。問題は単なる欲求充足の過程にあるのではなく、消費の担っている意味、すなわち人間をとりまいている社会的文脈の中でとらえられた消費の意味なのである。例えば、J. ボードリヤールは物が記号化された社会における消費を差異化の社会的過程あるいは社会的論理ととらえ直し、その消費の理論から大胆な社会論を展開している。⁽³⁾そこでは消費とは意味づけされたコードを解釈しながら関係の網の目を生きていくこととなる。

また、ボードリヤールにおける差異化の論理のように消費を社会的分脈の中でとらえることによって、社会の一部特権の上流階級であるところの「有閑階級」の存在様式と、それに主導されているアメリカ社会の在り様を考察したのはT. ヴェブレンであった。⁽⁴⁾彼は有閑階級に象徴的に見られる消費行動を「見せびらかしのための消費」と呼んだ。それは有閑階級が自らの地位を誇示し顕示するために行なわれる社会的行為である。その行為が有閑階級にのみとどまらず、社会の慣例や慣習イコール制度として定着する過程をヴェブレンは見事に描いている。ボードリヤールにせよヴェブレンにせよ、人間の行なう消費活動を単なる経済的行為としてではなく社会的文脈の中で位置づけることによって「消費社会」の解釈に迫ったのである。

ヴェブレンが問題にした社会は19世紀末から20世紀にかけてのアメリカであって、現代とは状況も異なっている。むしろ、ヴェブレンの時代よりも現代の方がはるかに「消費社会」と呼ぶのにふさわしいのは疑いのないことである。ヴェブレンの「見せびらかしのための消費」の検討は、我々に、現

(3) J. ボードリヤール『物の体系』および『消費社会の神話と構造』、詳しくは次回の文献リストを参照。

(4) T. Veblen, *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, New York, 1899. (なお、本稿で使用したのは1912年 Mentor 版である。)

代の消費社会を解説する有益な手掛りを与えてくれるだろう。それはヴェブレンを現代へ引きもどす作業ともなる。小稿の目的は、「消費社会」解説のさきやかな第一歩として、ヴェブレンの消費論についての考察を行うことである。ボードリヤールの「消費社会」論は次回でとりあげたい。

〔 2 〕

ヴェブレンの言う「見せびらかしのための消費 conspicuous consumption」とは何か。それは「有閑階級 leisure class」に特有に見られる社会的行為としての消費である。それは通常行なわれている消費ではなく「財の不生産的な消費⁽⁵⁾」であり、「無制限な財の消費、とくによりすぐれた等級の財の消費⁽⁶⁾」である。当然のことながら、それは生活に必要な最低額を越えたあらゆる消費を意味している。この見せびらかし消費は、それを浪費(waste)という視点から見ると「精神的な幸福感をもたらすような際立って消費的で虚栄的な支出⁽⁷⁾」ということになる。ヴェブレンは見せびらかしの消費あるいは浪費という二通りの使い方をしているが、それらは同じことを意味している。

なぜ有閑階級は見せびらかし消費を行うのか、また行わざるを得ないのか。この問題こそ『有閑階級の理論』の全体を貫くテーマである。ヴェブレンはその序において次のように述べている⁽⁸⁾。

「この研究の目的は、近代的生活のひとつの経済的要因としての有閑階級の地位と価値を吟味することである。しかし、議論をそうした枠内に厳然と閉じこめておくことは不可能であると判明した。それゆえ、必然的にこの制度の起源や系譜、そして同時に通常は経済的要因としては分

(5) *Ibid.*, pp. 61.

(6) *Ibid.*, pp. 63.

(7) *Ibid.*, pp. 80-81.

(8) *Ibid.*, pp. XX.

類されていないような社会的生活の諸様相に対してもかなりの注意が与えられている。」⁽⁹⁾

見せびらかし消費は「社会的生活の諸様相」のひとつであり、しかもそれは経済的要因として考えられることはなかったにも拘らず、ヴェブレンにとって有閑階級の考察の核となっている。以下、有閑階級および見せびらかし消費の位置とその意味についてヴェブレンの言うところを追ってみよう。

有閑階級 (leisure class) とは文字通り余暇あるいは閑暇を有している階級のことであるが、ヴェブレンによればそれは社会の上流階級であり、生産的な仕事や労働から免れており、政治、戦争、宗教儀式、スポーツや学問といった「ある程度名誉をともなった特定の職業」に就いている人々のことである。彼らにとっては生産的な労働に従事することは見苦しいことであり、禁忌すべきことである。

この有閑階級は私有制とともに生まれた、とヴェブレンは述べている。

「文化の進化系列において、有閑階級の出現は所有制 (ownership) の始まりと一致している。それは当然のことである。なぜなら、この二つの制度は一連の同じ経済的諸力から生まれたものだからである。その発展の最初の段階においては、有閑階級と私有制は社会構造の同一の全体的事実の単なる異なった局面にすぎない。」⁽¹⁰⁾

この所有制とはもちろん個人的所有制、すなわち私有財産制のことである。ヴェブレンによれば私有制は男による女の所有から始まり、労働生産物の所有へと拡大される。人間だけでなく物の所有が発生することにより「財の所

(9) 原文は some attention. 岩波文庫版では「多少の注意」と訳されているが、それでは本論の内容からして意味が通じない。ヴェブレンは経済的要因だけでなく社会的要因にも、かなりの、あるいは十分な注意を払わざるをえなかったのである。

(10) *Ibid.*, pp. 33.

有の一貫した体制」が完成される。有閑階級はこの私有制の初期の結果として出現し、掠奪文化から金銭的文化へと社会が移行するとともに「理論的にも実際的にも」有閑階級となり、「完全な形態の有閑階級という制度」が始まるのである。⁽¹¹⁾

私有財産制の特徴は、そのもとでの経済過程が「財の所有を求める人々の間の闘争」⁽¹²⁾という性格をおびるようになることである。ところで、財を所有あるいは蓄積する目的はその財の消費であると考えられている。少なくとも、経済理論においてはそうである。しかし、とヴェブレンは言う。

「私有制の根本にある動機は競争 (emulation) である。そして、この同じ競争という動機はそれが生み出した制度のより一層の発展においても、また、この私有制が関係する社会構造のすべての局面の発展においてもずっと作用しつづける。富を所有するということは名誉なこととなる。なぜなら、それは上下の区別 (invidious distinction) だからである。財の消費についても、また、その他の考える取得の誘因、とくに富を蓄積しようとする誘因についてもこれと同じように適切なことは言えないだろう。」⁽¹³⁾

(11) *Ibid.*, pp. 43. 「有閑階級という制度が最も発達しているのは、野蛮文化のより高い段階である。例えば、封建時代のヨーロッパや日本のように。」*Ibid.*, pp. 21.

(12) *Ibid.*, pp. 34.

(13) *Ibid.*, pp. 35. ここで使われている invidious という語は本来「不公平な」とか「不当な」という意味である。例えば、invidious comparison ならば「不公平な比較」ということになる。しかしながら、ヴェブレンはそうした意味では使っていない。同じ第二章の最後で次のように述べている。「改めて述べる必要もないであろうが、“invidious” という語の使用においては、この言葉によって特徴づけられるいかなる現象をもほめたたえたり、けなしたり、推賞したり、また嘆いたりしようとする意図は全くない。この言葉は次のような目的で、人々の比較を描くための技術的な意味で使われている。すなわち、審美的あるいは道徳的な意味における相対的な値打ちや価値に関して人々を評価し、等級づけを行ない、そして人々が自分自身や他人によって正しく判断されるような相対的な自己満足の程度を判定し、確定するために。上下の比較は、価値についての人々の品定め過程である。」pp. 40.

私有制は、こうして財の消費から財の所有へと人々をかり立てる。富の所有は名誉となるからである。

「私有制は、生活のための最低限というものとは関係のない基礎の上で始まって、ひとつの人間的な制度にまで成長した。その支配的な誘因は、最初から、富に付属している上下の区別であって、一時的あるいは例外的なものを除いて、それ以外の動機がその後のいかなる発展段階においても首位を奪うことはなかつた。⁽¹⁴⁾」

この上下の区別や比較は私有制以前にも存在していた。それは富の所有による区別ではなく、例えば制作本能 (the instinct of workmanship) にもとづく能力の比較であつた。⁽¹⁵⁾私有制が確立されると、財産は優越さや成功を慣習的に表わすものとなり、財産の所有が世の名声や尊敬の基礎となる。私有制の根本である競争がその名声や尊敬を獲得することを強制する。

すでに見たように、有閑階級の生活の特徴は生産的な労働や職業からの免除であつた。労働の禁忌は名誉ある行為であり、やがては品位の必要条件となる。それは「富の因襲的な証拠であり、それゆえ社会的地位の因襲的な標章⁽¹⁶⁾」となる。そして、富の価値を強調することは閑暇をより烈しく強調することを結果するようになる。ここに至って、有閑階級はその富や実力を所有するだけでなく、また、「有閑階級はすべての文明人の目からしてそれ自体でも、またその結果においても美しく高潔なものである⁽¹⁷⁾」にも拘らず、それを証拠だて世の中に見せびらかさねばならなくなる。そのまず第一は労働から離れていることを証明する閑暇である。これをヴェブレンは「見せびらかしのための閑暇 (conspicuous leisure)」と呼んだ。

(14) *Ibid.*, pp. 32.

(15) *Ibid.*, pp. 29.

(16) *Ibid.*, pp. 44.

(17) *Ibid.*, pp. 42.

ヴェブレンにとって閑暇とは怠惰や無作為ではなく、時間の非生産的消費を意味している。ひとつには生産的な労働には価値がないという意識から、ひとつには怠惰な生活のできる金銭的な能力のひとつの証拠として時間を非生産的に消費するのである。⁽¹⁸⁾ その結果、人目につかないような閑暇を見せびらかすことによって生まれたものとして、例えば礼儀作法や行儀といったものをヴェブレンはとりあげている。

「洗練された趣味、作法そして生活習慣は上品さの有効な証拠である。なぜなら、よいしつけには時間、熱心さそして費用が必要であり、時間や精力が仕事で手いっぱい⁽¹⁹⁾のものは身につけることができないからである。」

礼儀作法を生みだした見せびらかしの閑暇は、消費する品物の品位や、その上品な消費の方法についての趣味および比較に対する教育にまで発展する。⁽²⁰⁾ それは見せびらかしのための消費の基礎となる。

この見せびらかしの閑暇に関連して、ヴェブレンは代行的閑暇について述べている。⁽²¹⁾ 代行的閑暇 (vicarious leisure) とは婦人や召使いがその主人に代って行なう閑暇のことである。とりわけ主人の身の回りの世話をやく侍者や召使いの存在は、それ自体が、彼らの行なう仕事よりも、他人に見せるという点においてより重要な意味を持っている。こうした召使いといった代行的閑暇に従事する者から、その生活様式の特徴によって本来の有閑階級からは区別される派生的な代行的有閑階級が生まれてくる。彼らは支配階級である有閑階級の名声や尊敬を得るためにだけその労働に従事している。彼は本来的な生産労働からは免除されてはいるものの、その閑暇は当然彼ら自身の

(18) *Ibid.*, pp. 46.

(19) *Ibid.*, pp. 49. また、次のようにも言っている。「行儀作法は有閑階級の生み出したものであり、また典型的なものである。そして身分制度のもとでのみ十分に繁栄するものである。」 pp. 48.

(20) *Ibid.*, pp. 50.

(21) *Ibid.*, pp. 53-56.

閑暇ではなく、支配階級から強制された閑暇である。有閑階級という制度がそうした代行的有閑階級を必要としているのだ。

[3]

有閑階級の発展は、やがて、その閑暇の見せびらかしだけでなく、彼らの行う消費をもとりこんでいく。以下、有閑階級の見せびらかし消費について見てみよう。財の不生産的な消費は、金銭的文化以前の掠奪文化においても、主として勇敢さを示すものとして、また、人間の威厳のしるしとして名誉あるものであった。⁽²²⁾財の非生産的消費は、すなわち「奢侈品や快適な生活といったものは必然的に有閑階級のもの」であるから、男以外の女や子供に対するある種の飲食物や装飾品の消費の禁止（タブー）となって現われることもあった。⁽²³⁾ある種の食物や飲み物はこうして上流階級のためにだけ使用され、それらは価格が高ければ高いほど貴いもの尊敬すべきものだと考えられるようになる。女はヴェブレンの言う伝統的な慣習によって男の所有物であるから、彼女の行なう代行的消費をのぞいては生存に必要なものだけを消費すべき存在となる。

「奢侈品の消費は、本来、消費者自身の快樂に向けられるべき消費であり、したがって、それは主人 (the master) の標章なのである。」⁽²⁴⁾

こうして財の無制限な消費、とくに、よりすぐれた質の財の消費は有閑階級に属するものとなる。彼らは生活の必要最低限以上のものを消費するだけでなく、消費する財の質をも問題とする。「よりすぐれた財を消費することは富の証拠であり、それは尊敬されることとなる」からであり、「その反対に、⁽²⁵⁾それ相当な量と質とを消費できないということは劣等と汚点の標章となる」

(22) *Ibid.*, pp. 61.

(23) *Ibid.*, pp. 61.

(24) *Ibid.*, pp. 63.

(25) *Ibid.*, pp. 64.

からである。このことからさらに、有閑階級は消費財の価値あるものとそうでないものとを手際よく区別する能力を求められるようになり、食品、飲物、衣服、建築物、武器、ゲーム、ダンス、そして麻薬類といったものについての「鑑定家」となることを要請される。そのためには多大な時間と努力、つまり閑暇が必要であることは言うまでもない。これが見せびらかしの閑暇となることは既に見たとおりである。かくして、価値ありとされる財の見せびらかしのための消費は、その閑暇とならんで有閑階級にとって世の名声を得る最高の手段となる。

ところで、有閑階級は見せびらかし消費を自らの手でのみ行なうのではない。⁽²⁶⁾ ヴェブレンは次のように述べている。

「価値ある財の見せびらかし消費は有閑紳士には名声のための手段である。富が彼の手中に蓄積されればされるほど、彼自身の手助けのない努力は、その方法によっては自分の富裕さを十分に証明することができなくなる。したがって、友人や競争相手の助けが、高価な贈り物を与えたり、金のかかった饗宴や催し物を行うことによって動員される。」

有閑階級は、その見せびらかしのためには利用できるものなら何でも利用するというわけである。彼の友人や競争相手は、有閑階級が自らの手で消費しきれない財を彼らに代って消費することで、彼らの富裕さを証明するのである。続けて、ヴェブレンはこの贈り物や宴について述べている。

「贈り物や宴といったものは、無邪気な見せびらかしの起源とはおそろしく別の起源を有していたのであろうが、それらは見せびらかし消費という目的のための効用を非常に早い時から持つようになり、しかもそのような性格は現在にいたるまで保持されている。それゆえ、その点についての贈り物や宴会の効用は、今でもそうした慣習がよって立て本質的な

(26) *Ibid.*, pp. 64-65.

根拠となっている。」

ひとつの例としてヴェブレンはポトラッチ⁽²⁷⁾をあげている。

富の蓄積はさらに有閑階級内部での階級分化をもたらし、複雑な身分や等級の制度を生み出す。そこでは、例えば「金とは縁がない有閑紳士という階級⁽²⁸⁾」が存在することもある。このように本来の有閑階級と、その周辺に位置する代行的な閑暇や消費を行なう有閑階級という一大階層システムができあがる。この階層的システムの中では、当然、本来の有閑階級が主導権を持っている。その力は階層化された有閑階級にのみ及ぶのではない。社会の各階層の成員はより上位の階層の生活を理想とし、それに追いつこうと努力する。努力しなければならなくなる。

「有閑階級は名声という点で社会構造の頂点に立っている。したがって、その生活様式やその価値の標準は社会の名声の一般の尺度となっている。かかる標準に従うことは、それが近似という程度であっても、より低い階層⁽²⁹⁾にあるすべての階級に課せられた義務となっている。」

有閑階級の行う見せびらかし消費はかくして全社会のものとなる。ヴェブレン⁽³⁰⁾はくり返しこう述べている。

「高度に組織されたどのような産業社会においても、よき名声の基本となっているのは、究極的には金銭的な強さである。そして、金銭的な強

(27) ポトラッチ (potlatch) とは北アメリカの北西部に居住するクワキウトル族インディアン⁽²⁷⁾の集団に見られる贈与交換のことである。これは、マルセル・モースが彼の『贈与論』において初めてとりあげたのである。詳しくは、例えば山口昌男『文化人類学への招待』(1982年、岩波新書)を参照。

(28) *Ibid.*, pp. 65.

(29) *Ibid.*, pp. 70.

(30) *Ibid.*, pp. 70.

さを示し、そうすることによってよい名声を獲得し、それを維持する手段は閑暇であり、見せびらかしの消費である。」

慣習となった、それゆえ制度化された見せびらかし消費は、最も貧困な階級においても、もはやなくなることはない。ヴェブレンは最後に次のように断定する。

「そのような、より高度な要求や精神的な要求を満足させることを全て拒否してしまうほどに、物質的な欲望の前に絶望的に屈服してしまうような階級や国はひとつもない。」

私有制が生み落した有閑階級という制度は、その閑暇や消費を富を誇示する見せびらかしのための手段とした。最初は閑暇がその主たる手段であったが、社会の分化の進展とともにその席を消費にゆずることになる。とくに、社会の産業化が進めば進むほど、見せびらかし消費の効果は高まっていく。それは、産業社会においては、消費の地位そのものが高くなるからである。他方、名声の基盤としての見せびらかしの閑暇の位置が相対的に低下したのは、そうした消費の効用の増大という事実のほかに「制作本能」という力が働いている、とヴェブレンは言う。⁽³¹⁾制作本能は万人のなかに存在しており、人々を生産的な労働や職業に従事させる源なのであって、生産的能力や人間に有益なものを認めさせる力を持っている。逆に、無駄なもの浪費的なものをうとましいものとして軽蔑させるのもこの制作本能である。⁽³²⁾したがって、見せびらかしの閑暇や消費は、その浪費性の要素のゆえに制作本能と対立す

(31) *Ibid.*, pp. 75. ヴェブレンはこの制作本能については一冊の書物を著わしている。*The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York, 1914.

(32) ヴェブレンの言う制作本能とは、近代社会における合理的精神、あるいは合理主義に相当するものである。M. ヴェーバー流に言うならば「資本主義の精神」ということになるだろう。

ることになる。

「制作本能が見せびらかしの浪費という法則と衝突する限り、それは本質的な有効性を強調しようというのではなく、むしろ、明らかに無駄な嫌悪すべきもの、また美しいはずがないという不変の意識としてあらわれる。」⁽³³⁾

外見的には目的のないように見える閑暇は、とくに軽蔑すべき対象となる。制作本能は、浪費とぶつかることによって見せびらかしの閑暇にある種の変化をもたらす。それは既に述べた閑暇が生み出した礼儀や行儀作法を、社会が守らねばならないいわば儀式と化する。閑暇の社会化、制度化である。社会はこうして浪費をもとりこんでいくのである。

浪費についてはヴェブレンは次のような注釈を加えている。浪費という語の使い方はある意味では不相当である。その言葉には軽蔑的な響があるからだ。しかし、ここでの意味合いは人間の生産物や生命の不当な消耗ということではない。消費が浪費となるのは、それが人類の福祉や生活に役立たないからであって、個々の消費者から見て浪費であるからと言うわけではない。消費者がこういった形の支出を選ぶかはその消費者の好みや効用によって決まる。

「個々の消費者からみれば、固有の経済理論の枠内では浪費という問題は生じない。したがって、ひとつの専門用語として“浪費”という語を使用するということは、そうした見せびらかしの浪費という聖典のもとで消費者が求める動機や目的を軽蔑することを意味してはいない。」⁽³⁴⁾

見せびらかしの浪費はひとつの社会的事実であり、是か非かという問題ではないとヴェブレンは言いたいのだろう。

[4]

以上のように、私有制とともに生まれた有閑階級は見せびらかし消費をひ

(33) *Ibid.*, pp. 75.

(34) *Ibid.*, pp. 78.

とつての慣習として制度化してしまう。そこでは人々の趣味や感覚についての聖典をもつくり出す。見せびらかしの浪費の原理は何が本物であり、何が評判の高いものであるかを考える思考習慣の形成を導くのである。それは富の所有が名声の基礎であったように、常に金銭的な尺度でもって測られる。ヴェブレンの言う金銭的文化である。例えば、美しさの効用は、その物の価値の高低と密接に関連しているとヴェブレンは言う。スプーンを例にとってみると、高価な銀でつくられた手製のスプーンは同じ銀製で機械によってつくられたスプーンや、銀より安価で低級な金属でつくられたスプーンと比べて、その機能や有用性の点でよりよく役に立つことも、より役に立たないということもない。しかし、手製の銀のスプーンはよりよい美的感覚を与えてくれる。その満足感、おおむね、美という名のもとに隠されている高価という感覚の満足感である、とヴェブレンは言う。

「すぐれた品物について我々が行なう高い評価というものは、その品物の美しさのすなおな評価というよりも、しばしば、そのすぐれた名誉ある品質の評価であることが多い。見せびらかしの浪費を求めることは、意識としては通常我々の趣味の原則のなかに現われることはない。が、それでもやはり、美しさについての我々の感覚を取捨選択し、維持し、また、何が美しく何が美しくないのかを正しく判断させるような我々の区別を導く、ひとつの強制的な規範としてそれは存在しているのである。」⁽³⁶⁾

高価であるという基準は我々の趣味に影響を与える。我々は高価と美しさを切り離せなくなる。そして、「高価という標章は高価な品物の美的な特性として受け入れる」⁽³⁷⁾までになってしまう。良いから美しいのではなく、高いから美しいのであり、また美しいから良いのではなく、美しいのは高いから良

(35) *Ibid.*, pp. 88.

(36) *Ibid.*, pp. 97.

(37) *Ibid.*, pp. 97.

いのである。

趣味の基準に影響をおよぼしたように、見せびらかしの浪費の原理は当然のことながら本来の財にも強い影響を与える。財の第一次的な効用は、ヴェブレンによれば、人間の生活をより一層充実させるための手段としてのその効率にある。しかし、人間に生来の競争心が上下の区別的手段として財の消費をとらえたように、見せびらかし消費は財に第二次的な効用を与えた。それは、先に見たのと同じように、高価な財のもつ効果である。

「高価な財の消費が価値あるものであり、外面上の機械的な目的のための有用性をその財に与えるような費用を越えた、かなりの大きさの費用を含んだ財が名誉あるものなのである。⁽³⁸⁾」

財にたっぷり金がかかっていることが価値の標章となり、単なる機械的な目的のための安上りな有用性だけを示し、上下の区別を行うぐらい十分な費用を含んでいない財は価値がなく、魅力のないものとなる。「安かろう悪かろう (Cheap and Nasty)」なのである。物のもつ機能や有用性はその価格の前にくすんでしまう。そして、財貨は、売れるためには物的な効用以上に、人々の目を引きつけるような標章を有していることが求められるようになる。こうして、見せびらかしの消費は完成される。

ヴェブレンは、また、こうした見せびらかしの浪費の原理を衣服に対する支出のあり方を例にとりて説明している (第7章「金銭的文化の表現としての衣服」)。その内容は今まで見てきたことから容易に想像がつくであろう。ここでは詳しくはとりあげないでおこう。

[5]

以上見てきたように、ヴェブレンの有閑階級の考察においては、というよりも、有閑階級という制度を生み出した私有制以後の社会の存在様式の解説

(38) *Ibid.*, pp. 111.

においては、「浪費」と「上下の区別」という概念が鍵となっている。浪費とは時間と財貨の無制限で非生産的な消費であった。それはヴェブレンの言葉でいえば慣習となっており、ひとつの制度⁽³⁹⁾として存在していると言えるだろう。それは、言ってみれば過剰の処理の方法のひとつなのである⁽⁴⁰⁾。見せびらかしの消費が見せびらかしてあるためには、その消費が最初から過剰なものでなければならない。でなければ、そういった浪費を社会が認めるはずがない。そうであるならば、問題は、この過剰性がどこから生じるのかということになる。ヴェブレンはこの間に直接答えてはいない。それに答えを出すことは、消費や交換のもつ社会的意味を探ることであり、さらに経済や社会のあり方そのものを問うことである。それは、小稿の枠を越えているが、例えばヴェブレンもとあげているポトラッチの解釈などはひとつの答えを出してくれそうである。

上下の区別はこの過剰性の浪費を促進する。それは競争と同義である。上下の区別も、競争も、ヴェブレンによれば人間に生来のものである。「競争という、したがって上下の区別という性癖は古くから始まったものであり、⁽⁴¹⁾広く行きわたった人間の性質である」と述べている。この上下の区別はボードリヤールによれば差異化の論理ということになる。

浪費や上下の区別は現代でも見られることである。いや、現代でこそ十二分に行きわたっていると言うべきか。ヴェブレンが言わんとしていたことを

(39) ヴェブレンのいう制度とは、社会構造の進化の過程における人間の習慣的な精神的態度や傾向のことである。彼は次のように述べている。「制度 (institution) とは、実際には、個人および社会の特有の関係や特有の機能についての支配的な思考習慣である。したがって、ある社会の発展の一定の時点や一定の地点で作用している制度の総体から成り立っている生活様式は、心理学的な面において支配的な精神態度、あるいは支配的な生活の理論として広く特徴づけることができるだろう。かかる精神態度や生活の理論は、その一般的な特性について、結局は支配的な型の特徴という基準に帰することができる。」 *Ibid.*, pp. 132.

(40) 過剰ということについては、例えば G. バタイユ『呪われた部分』を参照。その他、湯浅起男『稀少性と経済余剰』(『経済評論』1981年10月号) など。

(41) *Ibid.*, pp. 84.

現代にひきもどしてみると、そこには様々な現代的な特徴が浮かびあがってくる。人々が求めているのはもはや名声ではなく、消費する欲求であり、快楽である。消費されるものに意味があるのではなく、消費することに意味がある。物の機能や有用性は、ヴェブレンの時代よりもさらにその固有の意味を失っている。物は今や記号となったのだ。⁽⁴²⁾これこそ見せびらかしの消費の最高の形態であろう。

(42) ボードリヤール、前掲書。このことが次回のテーマとなる。